

1976 (昭和51) 年に開業した五戸まきば温泉は、当時80歳を越えていた小笠原永子が掘削したことで話題になった。アジア・太平洋戦争末期の1944 (昭和19) 年に五戸町へ住

み着いた小笠原は、畜産業を営む傍ら、敷地内の一部で足下に温かみを感じたことがあった。温泉があると直感した彼女は、温泉の掘削を夢見るようになった。

しかし牧場の経営は決して楽ではなく、温泉掘削の夢は中々実現できなかつた。その後、30年が経過した

1975 (昭和50) 年の5月、小笠原は牧場の一部を売り払って温泉の掘削を始めた。老齢のため

牧畜業を続けられなくなると感じたからでもあった。小笠原は保健所に

熱心に取り組み、11月に60度の湯脈を発見した。大いに喜んで彼女は孫の菊池徳太郎と相談し、翌年の6月より温泉宿の建設に着手した。牧場に湧いた湯ということで、施設の名称は「五戸まきば温

五戸まきば温泉=1980～90年代・中園裕所蔵

泉」と決まった。実は温泉の掘削中、小笠原は人気作家の宇野千代と会見している。足下に温かみを感じるや否や、すぐに掘削を開始し、温泉施設まで造り上げた小笠原の行動に「亢奮」し、彼女の「遣る気」を祝福したかったからだという。

しかし宇野は、小笠原が温泉を掘削するに至るまで30年の歳月が過ぎていた事

お婆ちゃんがつ造った

まきば牧場の湯

中園裕

(県民生活文化課 県史編さんグループ主幹)

浅いが、五戸町の歴史と無縁ではない。小笠原が掘削を開始する前の1973 (昭和48) 年、町は温泉のすぐ南側に文化スポーツ施設を備えた「ひばり野公園」の建設に着手した。公園は1977 (昭和52) 年に開催される「あすなる国体」のサッカー会場に指定された。国体開催の前に、青森県内では道路の舗装やバイパスの新設、観光施設の整備などが進んだ。五戸町も同様で、1980 (昭和55) 年に国道4号バイパスが開通。翌年にひばり野公園が完成し、町立公民館も開館した。道路や施設が整い、町民が公園で楽しく過ごし始めた時期は、温泉が開業して間もないころだった。五戸町をはじめ三八地区は元々温泉が少ない。ひばり野公園の関連施設で楽しんだ人々が、すぐ近くの温泉を愛用するのは自然の流れだろう。

小笠原は大勢の町民が温泉を利用できるように努めた。高齢の町民を対象とした毎週1回の無料入浴は評判をよんだ。彼女は1982 (昭和57) 年に90歳で死去したが、後継者となった孫の菊池が彼女の遺志を継承した。このため菊池は老人福祉に寄与したことで、1987 (昭和62) 年1月に町の功労者として表彰された。

その後、菊池自身が高齢となり温泉の経営が難しくなった。だが2006 (平成18) 年、幸いなことに建設業者の「東北産業」が経営を継承。露天風呂を新設するなど施設を改良した。福祉事業も手がけていた東北産業は、東日本大震災や県南地方を襲った大水害に際し、被災者たちを無料招待して大いに喜ばれた。

小笠原が亡くなって久しい現在、彼女を知る人は少なくなつた。彼女が町民のためと願っていた温泉は、孫の菊池から東北産業へと受け継がれている。だからこそ、温泉を掘削し、宇野を亢奮させた。温泉のお婆ちゃん。の思いも後世へ語り継いで欲しいのだ。